

与謝野晶子訳

源氏物語 旬宮卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

匂宮

紫式部

與謝野晶子訳

春の日の光の名残なごり花ぞのに匂にほひ薰かをると

思ほゆるかな

(晶子)

光君ひかるきみがおかれになつたあとに、そのすぐれた美貌びぼうを継ぐと見える人は多くの遺族の中にも求めることが困難であつた。院の陞

下はおそれおおくて数に引きたてまつるべきでない。今の帝の第<sup>みかど</sup>三の宮と、同じ六条院で成長した朱雀院<sup>すざく</sup>の女三<sup>によさん</sup>の宮<sup>みや</sup>の若君<sup>ふたり</sup>の二人がとりどりに美貌の名を取っておいでになって、実際すぐれた貴公子でおりになつたが、光源氏がそうであつたようにまばゆいほどの美男というのではないようである。ただ普通の人としてはまことにりっぱで艶<sup>えん</sup>な姿の備わっている方たちである上に、あらゆる条件のそろつた身分でありになることも、光源氏にやや過ぎている、人々の尊敬している心が実質以上に美なる人、すぐれた人にする傾向があつた。紫夫人が特に愛してお育てした方であつたから、三の宮は二条の院に住んでおいでになるのである。

むろん東宮は特別な方として御大切にあそばすのであるが、帝もお后きさきもこの三の宮を非常にお愛しになって、御所の中へお住居すまいの御殿も持たせておありになるが、宮はそれよりも気楽な自邸の生活をお喜びになって、二条の院におおかたはおいでになるのであつた。御元服後は三の宮を兵部卿ひょうぶきやうの宮と申し上げるのであつた。女一にょいちの宮は六条院の南の町の東の対たいを、昔のとおり部屋へやの模様変えもあそばされずに住んでおいでになって、明け暮れ昔の美しい養祖母の女王にょおうを恋しがっておいでになった。二の宮も同じ六条院の寝殿を時々行ってお休みになる所にあそばして、御所では梅壺うめつぼをお住居に使っておいでになったが、右大臣の二女をお嫁めと

りになっていた。次の太子に擬せられておいでになる方で、臣下が御尊敬申していることも並み並みでなくて、その御人格も堅実な方であつた。

源右大臣には何人もの令嬢があつて、長女は東宮に侍して、競争者もないよい位置を得ているのである。下の令嬢はまた順序どおりに三の宮がお嫁<sup>めと</sup>りになるのであるろうと世間も見ているし、中宮<sup>ちゆうぐう</sup>もそのお心でおありになるのであるが、兵部卿の宮にそのお心がないのである。恋愛結婚でなければいやであると思つておいでになるふうなのであつた。夕霧の大臣も同じように娘たちを御兄弟の宮方に嫁<sup>とつ</sup>がせることを世間へはばかっているのであつ

たが、もし懇望されるなら同意をするのに躊躇ちゆうちゆうはしないというふうを見せて、兵部卿の宮に十分の好意を見せていた。大臣の六女は現在における自信のある貴公子の憧憬どうけいの的になっていた。

六条院がおいでにならぬようになってから、夫人がたは皆泣く泣くそれぞれの家へ移ってしまったのであつて、花散里はなちるさとといわれた夫人は遺産として与えられた東の院へ行つたのであつた。中宮は大部分宮中においでになったから、院の中は寂しく人少なになつたのを、夕霧の右大臣は、

「昔の人の上で見ても、生きている時に心をこめて作り上げた家が、死後に顧みる者もないような廃邸になっていることは、栄枯

盛衰を露骨に形にして見せている気がしてよろしくないものだから、せめて私一代だけは六条院を荒らさないことにしたいと思う。近くの町が人通りも少なく、寂しくなるようなことはさせたくない」

と言って、東北の町へあ的一条の宮をお移しして、三条の邸やしきと一夜置きに月十五日ずつ正しく分けて泊っていた。二条の院と言つて作りみがかれ、六条院の春の御殿と言つて地上の極樂のようになされた玉の台うてなもただ一人の女性の子孫のためになされたものであつたかと思えて、明石夫人あかしは幾人もの宮様がたのお世話をして幸福に暮らしていた。夕霧はどの夫人に対しても院がお扱い



になったとおりに、皆母として奉仕しているのであるが、紫の女王がこんなふうに院のおあとへ残っておいになれば、どんなに自分は誠意をもってお尽くしすることであろう、終わりまで特別な自分の好意というものを受けてもらえるというようなことはなかったと思うと、今も大臣は残念でならぬように思うのであった。

天下の人で六条院をお慕いせぬ者はなくて、何につけても火が消えたように思つて歎<sup>なげ</sup>かぬおりはないのであつた。まして院に親しくお仕えしていた人たち、夫人がた、宮がたが院にお別れした悲しみに流す涙というものはどれほどの量であるかしのれないので

ある。それとともに今も紫夫人を追慕する思いはだれにもあつて、人からその女王の思い出されていない時というものはないのである。春の花の盛りは短くても印象は深く残るものであるというべきであらう。

二品にほんの宮みやの若君は院が御寄託あそばされたために、冷泉院れいぜいの陛下がことにお愛しになった。院の後の宮も皇子などをお持ちにならずお心細く思召おぼしめしたのであつたから、この人をお世話あそばして老後の力にしたいと望んでおいでになった。元服の式も院の御所であげられた。十四の歳であつた。その二月に侍従になつて、秋にはもう右近衛うこんえの中将に昇進した。推薦権をお持ちになる位階

の陞叙しやうじゆもこの人へお加えになつて、なぜそんなにお急ぎになるか  
と思うようにずんずんと上へお進ませになるのであつた。お住居  
の御殿に近い対をこの人の曹司そうしにおあてになつて、装飾などは院  
御自身の御意匠でおさせになり、若い女房から童女、下仕えの者  
までもすぐれた者をお選りよととのえになつた。人が姫君をかしず  
く以上の華奢かしやな生活をおさせになるようでもまばゆく見えた。院の  
おそばの女房の中からも、後の宮の女房の中からも容貌ようぼうのすぐれ  
た、感じのよい、品のある女は皆中將の曹司付きにあそばされ、  
院にすることがどこにいるよりも好きになるようにとお計らいに  
なつたのであつて、うれしい玩具品がんぐひんのように思召すのであつた。

亡<sup>な</sup>くなった太政大臣の女御<sup>によご</sup>の腹からただお一方の内親王がお生まれになったのを、院が非常に珍重あそばすのに変わらず中将をお扱いになるのである。それは一つは後の宮をお愛しになることが年月とともに増してゆくことによるものらしくて、それほどまでにはと話を聞いては人が信じないほど中将を院はお愛しになった。

現在の母宮は仏勤めをばかりしておいでになって、月ごとの念仏、年に二度の法華<sup>ほっけ</sup>の八講、またそのほかのおりおりの仏事などを怠らずあそばすだけがお役目のようで、出入りする中将をかって御自身のほうが子のように頼みにしておいでになったか

ら、お気の毒でおそばにもいたかったし、院からも、宮中からも  
始終お呼ばれはするし、東宮も御弟の宮がたも親友のように思召  
していっしょにお遊びになろうとされるしするため、暇がなく  
苦しい中將は一つの身を幾つかに分けて使うことができぬかとさ  
え歎息たんそくしていた。時々耳にはいつて、子供心にも腑ふに落ちず思っ  
たことは、今も不可解のままに心に残っているが、尋ねる人もな  
かった。宮にはそうした不審をいだいているとさえ思われする  
ことのはばかられる問題であつたから、ただ自身の心のうちでだ  
け絶え間なくそのことを考えて、

「どういうことから自分が生まれるようになったのか、何の宿命

でこんな煩悶はんもんを負って自分は人となったのか、善巧ぜんぎょう太子はみずから釈迦しやかの子であることを悟ったというが、そうした知慧ちえがほしい」

と独言ひとりごとをする時もあった。

おぼつかなたれに問はまし如何いかにして始めも果ても知らぬわが身ぞ

返事はだれもしてくれない。自身の健康などもこんなことでそこなつてゆくような気がして中将は歎なげかれるのであった。宮がお

年の若盛りに尼におなりになったのも、いったいどれほどの信仰  
がおりになったために、にわかに出家を断行あそばされたの  
か、自分の生まれてくることが不祥なことであつたために、厭世<sup>えんせい</sup>  
的なお気持ちにもなられたのであろう、人がその秘密を悟らずに  
いるとは思われない、暗闇<sup>くらがり</sup>に置くべき問題であるから自分には人  
が告げないのであろうと中将は思った。朝暮<sup>あけくれ</sup>仏勤めはしておいで  
になるようではあるが、確固とした信念がおりになるとは思え  
ない女の悟りだけでは御仏<sup>みほとけ</sup>の救いの手もおぼつかない、五つの戒  
めも完全に保っておゆきになれるかも疑問なのであるから、自分  
がその精神だけを補うことにして、後世だけでも御安楽にしてさ

しあげたく思った。この人はお崩れかくになった院も、自分というもののために不快な思いにお悩まされになったかもしれぬと思うと、次の世界でももう一度お逢あいしたいという望みが起こり、元服して社会へ出ることを厭いとわしがったのであるが、意志を通すこともできなくて、出仕する身になった時から、八方のはなやかな勢いがこの人を飾ることになっても、これはうれしいとは思われないで、ただ静かな落ち着いた人になっていた。帝も母宮の御縁故でこの中將に深い愛をお持ちになったし、中宮はもとより同じ院内で御自身の宮たちといっしょに生おい立って、いっしょにお遊ばせになったところのお扱いをお変えにならなかった。



「末に生まれてかわいそうな子です。一人前になるまでを自分が見てやることもできない」

と、院が仰せられたことをお思いになって、あわれ憐みを深くかけておいでになるのである。夕霧の右大臣も自身の公達きんだちよりもこの人を秘蔵がって丁寧に扱うのであった。昔の光源氏は帝王の無二の御愛子ではあったが、嫉妬しつとする反対派がいたり、母方の保護者がなかったりして、そうめい聡明な資質から遠慮深く世の中に臨んでおいでになって、一世の騒乱になりかねぬようなことになった時も、いさぎよく自身で渦中かちゅうを去り、宗教を深く信じて冷静に百年の計をされたのである。この中將は若年ですでにあらゆる条件のそ

ろった恵まれた環境に置かれていた。そしてそれに相当した優秀な男子でもあるのである。仏が仮に人として出現されたかと思われるところがこの人にあつた。容貌ようぼうもどこが最も美しいというところではなくて、目を驚かすものもないが、ただ艶えんで貴人らしくて、賢明らしいところが万人に異なっているのである。この世のものとも思われぬ高尚こうしょうな香を身体からだに持っているのが最も特異な点である。遠くにいてさえこの人の追い風は人を驚かすのであつた。これほどの身分の人が風采ふうさいをかまわずにありのままで人中へ出るわけはなく、少しでも人よりすぐれた印象を与えたいという用意はするはずであるが、怪しいほど放散するに似て忍び歩き

をするのも不自由なのをうるさがって、あまり薫香たきものなどは用いない。それでもこの人の家に蔵しまわれた薫香たきものが異なつた高雅な香の添うものになり、庭の花の木もこの人の袖そでが触れるために、春雨の降る日の枝の雫しずくも身にしむ香を放つことになつた。秋の野のだけれどもない藤袴ふじばかまはこの人が通ればもとの香が隠れてなつかしい香に変わるのであつた。こんなに不思議な清香の備わつた人である点を兵部卿ひやうぶけいの宮は他のことよりもうらやましく思召おもほしめして、競争心をお燃やしになることになつた。宮のは人工的にすぐれた薫香をお召し物へお焚たきしめになるのを朝夕のお仕事にあそばし、御自邸の庭にも春の花は梅を主にして、秋は人の愛する女郎花おみなえし、小男さおし

鹿<sup>か</sup>のつまにする萩<sup>はぎ</sup>の花などはお顧みにならず、不老の菊、衰えてゆく藤袴、見ばえのせぬ吾<sup>われ</sup>木香<sup>もこう</sup>などという香のあるものを霜枯れのころまでもお愛し続けになるような風流をしておいでのであつた。昔の光源氏はこうしたかたよつたことはされなかつたものである。

源中將は始終宮の二条の院へお伺いするのであつて、音楽の遊びの行なわれる時にも優越を誇るような笛の音を吹き立てる相手をも、互いに好敵手と認める若いどうしであつた。世間も黙つてはいなかつた。匂<sup>にお</sup>う兵部卿、薰<sup>かお</sup>る中將とやかましく言つて、すぐれた娘を持つ貴族たちはこの貴公子たちを媚に擬して、好奇心の起

こるようにしむける者もあるのを、宮は相手の女の価値を相当なものと考えられる人へは手紙を送ってごらんになって、なお細かく相手を観察しようとされるのであった。しかも熱心にだれを得なければならぬとお思になる女はなかった。冷泉院れいぜいの女一いっしの宮みやと結婚ができたらうれしいであろうと勾宮にみつみやが思いになるのは、母君の女御も人格のりっぱな尊敬すべき才女であって、姫君もさもあるはずにすぐれた評判をとっておいでになる方だからである。遠くからの評判だけではなく勾宮は姫宮のおそばにいる女房から細かな御様子を聞いてもおおいでになるのであったから、忍びがたく恋のようにも今ではなっていた。

中將は人生を味気ないものと悟っているのであるから、寂しいからといって、恋愛などをしては、かえってこの世を捨てる際の妨げになるであろうということを知っていて、保護者との関係の煩瑣はんさな女性に求婚するようなことははばかれるのであった。自身では永久にこの冷静な態度が続けられるものと思っていたであろうが、それはただ現在の薫中將が熱情をもって愛する人がないからであろうと思われる。親兄弟の同意せぬ恋愛結婚などはまして遂行すべくもない薫である。十九になつた歳としに三位の参議になつて、なお中將も兼ねていた。帝も後も愛を傾けておいでになる人で、臣下としてこれ以上幸福な存在はないと見られる薫では

あるが、心の中には純粹な六条院の御子と思われぬ不幸な認識がひそんでいて、樂天的にはなれない人で、貴公子に共通な放縱な生活をするようなことも好まなかった。静かに落ち着いたものの見方をする老成なふうの男であると人からも見られていた。兵部卿の宮の恋が年とともに態度の加わる院の一品いっほんの姫宮も、一つの院の中にいる薫には、ことに触れて御様子ばかりもするのであつて、評判どおりに優秀な御素質の貴女らしいことを知っては、こんな方を妻にできれば生きがいを感じることであらうと思うのであるが、院が御実子同然な御待遇を薫に与えておいでになるものの、姫宮との間だけは嚴重にお隔てになるのを知っていて

は、しいて御交際を求めにゆく気にはなれないのであった。自分ながらも予期せぬ恋の初めの路に踏み入るようなことがもしあつては、宮のためにも、自身のためにもよろしくないと想着、親しもうとは心がけなかった。

人に愛さるべく作られたような風采ふうさいのある薫かおるであつたから、かりそめの戯れを言いかけたにすぎない女からも皆好意を持たれて、やむなく情人関係になつたような、まじめには愛人と認めていない相手も多くなつたが、女のためには秘密にするほうがよいと思つて、皆蔭かげのことにしておいて、無情だと思われぬ程度にだれの所へも人目を紛らして通つて行くのを、女のほうではかえつ



て気が詰まるように苦しく思い、薫の誘うままに三条の母宮の所へ女房勤めに集まって来るのが多くなった。冷淡な態度を始終見せられているのも苦痛ではあったが、絶縁されるよりはと心細い恋人たちは思つて、女房勤めをする身分でない人々もこうして薫とはかない関係が続けることで慰んでいるのであった。さすがになつかしい、目に見るだけでも情感を受けられる人であつたから、どの女もしいてみずからを欺くようにしてこの境遇に満足していた。

「宮様の御存命中は毎日お目にかかることを怠らないつもりだから」

と薫中將は言っていた。こんなふうの人であつたから、夕霧の右大臣もおおぜいある娘の中の一人は匂宮へ、一人はこの人の妻にさせたいという希望は持っていて、言いだすことをはばかっていた。なんといっても内輪どうしのことであつて、世間の聞こえもおもしろくないとは大臣も知っているのであるが、この二人のすぐれた貴公子に準じて見るほどの人もない世の中ではしかたがないと考えられるのであつた。雲井くもいの雁夫人かりの生んだ娘たちよりも藤典侍とうてんじにできた六女はすぐれて美しく、性質も欠点のない令嬢なのであつた。劣つた母に生まれた子として世間が輕蔑けいべつして見ることを惜しく思つて、女二の宮が子供をお持ちになることがで

きずに寂しい御様子であるために、六の君を大臣は典侍の所から迎えて宮の御養女に差し上げた。よい機会に二人の公子に姫君の気配けはいをそれとなく示したなら、必ず熱心な求婚者になしうるであろう、すぐれた女の価値を知ることとは、すぐれた男でなければできぬはずであると大臣は思つて、六の君を後の候補者というようおおぎような大形な扱いをせず、はなやかに、人目を引くような派手はでな扱いをして貴公子の心を多く惹ひくようにしていた。

御所の正月の弓の競技のあとで、左大将でもある夕霧の大臣の家で宴会の開かれるのを、大臣は六条院ですることにして匂宮にも御来会を願っていた。賭弓かけゆみの席には皇子がたの御元服あそばし

たのは皆出ておいでになった。后腹きんきばうの宮は皆気高けだかくお美しい中にも、風流男みやびおの名を取っておいでになる兵部卿の宮はやはりすぐれて御風采ふうさいがりっぱにお見えになった。第四の皇子は常陸ひたちの太守で  
おありになるが、この方は更衣腹こういばらで、思ひなしかずっと見劣りが  
された。例のことであるが勝負は左ばかりが勝ち続けた。例年よ  
りも早く競技は終わって左右の大將は退出するのであったが、匂  
宮、常陸の宮、后腹の五の宮を大臣の大將は自身の車へいっしょ  
にお乗せして帰ろうとした。薫は負け方の右中將で、そつと退出  
して行こうとしていた車を、大臣は、

「宮様がたがおいでになるお送りにおいでにならないか」

と言つてとどめさせて、子息の衛門督<sup>えもんのかみ</sup>、権中納言<sup>ごん</sup>、右大弁そのほかの高官をそれへ混ぜて乗せさせて六条院へ来た。

やや遠い路<sup>みち</sup>を来るうちに雪も少し降り出して艶<sup>えん</sup>な気のする黄昏<sup>たそがれ</sup>時<sup>とき</sup>であつた。笛などもおもしろく吹き立ててはいって行つた。六条院は、ここ以外にはどんな御仏<sup>みほとけ</sup>の国でもこうした日の遊び場所に適した所はないであろうと思われた。寢殿の南の庇<sup>ひさし</sup>の間の端に定例どおり中將が南向いて席につき、北向きに主人の座に対して来会者の親王がた、高官たちの席が作つてあつた。酒杯が出て夜がおもしろくなつたところに「求子<sup>もとめこ</sup>」が舞われた。左の手で抑え<sup>おさ</sup>、右の手で抑えて幾度か袖<sup>そで</sup>を斜めにするこの時の風の動きに庭の梅

の香がさつと家の中へはいつてきて、源中將が身に持つにおいを誘うのも艶な趣のあることであつた。わずかな透き間からのぞく女房なども、

「闇やみはあやなし（梅の花色こそ見えね香やは隠るる）という時間にもあの方のおいだけはだれにだってわかります」

と言つて薫をほめていた。大臣もそう思つていた。容貌ようぼうも風采ふうさいも平生以上にまたすぐれて見える薫が行儀正しく坐ざしているのを見て、

「右近衛うこんえの中將も声をお加えなさい。あまりに客らしくしているではありませんか」

と言うと、感じのよいほどの中音で、「神のます」など、  
求子<sup>もとめこ</sup>の一ふしをうたった。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---